Chapter 13 : **ゲンガーの幽霊ギャンブル**

街灯の陰から笑い声をこらえながら、ゲンガーはその光景を見ていた。

ガブリアスの臭いトイレ爆発。

ヤミラミとヤレユータンの空中大惨事。

ピカチュウの運命のウンコ顔面着地。

そして、ニャースがほとんど卒倒しかけた様子。

ゲンガーは姿を消して、悪戯な笑みを耳まで広げて浮かんでいた。

「奴ら…汚らわしいな」と呟く。「でも、汚らわしくも天才的だ。」

その目は暗いインスピレーションに輝いていた。

「さあ、俺もゲームに戻る時だ。」

ターゲット：ゼラオラの独身寮。

山のふもとに隠されたハイテクな部屋。アニメのポスター、違法なポーキーマン雑誌、未払いの請求書の山、そして“PRIVATE. DO NOT OPEN.”と書かれた怪しいホームサーバー。

ゼラオラはまだ帰宅していなかった。

完璧だ。

ゲンガーは壁をすり抜け、中にこうしたものを携えていた：

* 腐ったタマタマの黄身が漏れたゴミ袋
* グレイシアのスライム爆弾数個
* 「DO NOT JUDGE ME」と書かれたロップニーの盗難写真

すぐに作業に取り掛かった。

黄身をゼラの大事なゲーミングチェアにぶちまけ、

雑誌を便座の下に詰め込み、

換気口にグレイシアのガスを充満させ、

最後に壁に光るインクでメモを残した：

「幽霊されちまったな。溶岩風呂でも試してみろ。—G」

ゲンガーは霧となって消え、狂気の笑い声を響かせながら浮かんでいった。

数時間後…

ゼラオラがムームーミルクをすすりながら帰宅し、一人で歌っていた。

「ランクアップしなきゃ…ガルドのスキンを引かなきゃ…おっと、ジャックポット」

バシャーン。

彼は黄身でベタベタの床に足を踏み入れ、部屋を横切り、換気口のグレイシアガスに顔面から激突し、バイオハザード爆発を引き起こした。

部屋は揺れ、

山全体が震えた。

それでも、

ゼラオラは無傷で着地した。

鼻をひくつかせて言った。

「うげっ。誰か嫉妬してやがるな。」

リモコンを押すと、隠し清掃システムが散らかりを吸い取った。

彼はあくびをし、秘密の地下スパに入って、のんびりと言った。

「バカなゴーストタイプどもめ。俺はRNG運で動いてるんだ。お前らなんか触れやしねぇ。」

カルマフーディーニ：発動。

一方、近くの下水道管で…

ゲンガーは幽霊ポータルから呆然と見ていた。

「何だよ…あいつ、俺のイタズラ消しやがった!?」

ヤレユータンはまだカビた豆を噛みながら肩をすくめる。

「奴は何でも避けるらしいぜ。ホウオウの道徳講義からも逃げ出したとか言われてる。」

ヤミラミはもたれかかって言った。

「あれはもうポケモンじゃねぇ…カルマそのもののバグだ。」